

陳舜臣

夢ざめの坂

上



夢ざめの坂 上

陳舜臣

講談社

夢ざめの坂 上

定価 一四〇〇円(本体一三五九円)

第一刷発行 一九九一年六月二十四日

著 者 陳舜臣

発行者 野間佐和子

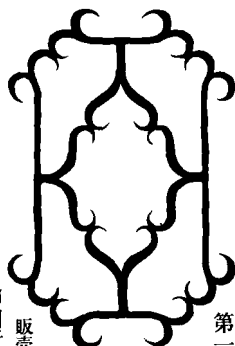
発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽二―二―二 電話 出版部 〇三―五三九五―三五〇五
販売部 〇三―五三九五―三六三一 製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落し本・乱し本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り換えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。



夢ざめの坂 ● 目次

たすね人	5
リラ	20
操り人形	42
アシタの友	63
悟心尼	78
とらえた影	98
女の航跡	123
別章 I	144
秋風白	166
遺民	198
ひときれの海	216
涙点多し	243
コンマ	270

装画 装幀
深津真也 武山 忠

夢
ざ
め
の
坂

上

たずね人

この一年來のことを訊かれると、どんなことでも、浦上隆志には自信のある返事ができない。ものごとを、ゆつくりと觀察する心のゆとりなどなかったからである。

忙しかったのではない。妻を亡くしたあと、さまざまな行事や手続やあと始末は、妻の兄弟たちが、てきぱきと処理してくれた。そして、隆志はただ茫然としていただけだった。

いま、すばらしい美女が、とつぜん隆志の目の前にあらわれて、彼女の夫のことをたずねているのだ。

伊庭潤いどうん

それが彼女の夫の姓名であり、半年ほど前に姿を消して、いまにいたるまで消息がない。

隆志はその名前を知っているし、顔もぼんやりとおぼえている。

いっぷう変わった人物だと、その美女に言われると、そういえばそうだったという気もした。「なにか伊庭について、お気づきのことはございませんでしたか？」

杉坂房子と名のつたその美女は、ほつれ毛を小指でかきあげながらたずねた。

新しい教養講座の受付中だったから、この三月のことである。一人の男が受講申込用紙にその場で書きこみ、臨時受付の塩村真弓に渡した。真弓が、

イバさんですね？

と、たずねると、

——いえ、イニワと読んでください。

と、その男は答えた。

伊庭潤については、初対面のその場面が最も強い印象を隆志の記憶にのこしている。

初対面といつても、隆志は伊庭と面とむかつて会ったのではない。伊庭が事務所に申込書を提出し、それを塩村真弓が受理した場面に、たまたま隆志が居あわせていたにすぎなかった。

「私は教室の責任者ですが、授業を担当していませんので、伊庭さんとはほとんど接触がありませんでした。水墨画は^{おおまほうかい}大前茅海先生が指導していましたから、大前先生におききになればいかがでしょうか」

隆志はそう答えた。責任者ということばを使つたが、オーナーという表現をさらつたからである。

「大前先生は、いつおいでになるのですか？」

と、杉坂房子はたずねた。

「明日です。火曜と金曜ですから」

壁のほうに目をやって、浦上隆志は答えた。そこには教養講座のポスターが貼られ、時間割もしるされていた。

神戸の三宮さんのみやにも、つぎつぎと高層ビルが建ったので、それに埋もれたようになって目立たないが、「浦上ビル」も新築当時は、いささか精彩せいさいを放っていたものだった。

エレベーターのない四階建のビルが、五十坪の敷地に建っている。

浦上隆志の唯一の不動産である。

浦上ビルの一階は、電気製品販売会社のショールームで、二階はその会社の事務所のほか、二つの会社のオフィスに貸していた。

はじめ浦上隆志は、三階を自分のオフィスに使い、四階を自宅にしていた。だが、やがて三階のフロア全部を使いこなすには、自分の能力が及ばないことに気づき、その三分の二を「文化教室」にしたのである。妻の友人である塩村真弓の英語教室と、日本画家大前茅海の水墨画教室とであった。

杉坂房子は失踪した夫の行方を探し、神戸浦上ビルの大前水墨画教室に通っていたことをつきとめた。

大前水墨画教室は、初心者クラスと実技指導科との二つのコースがあり、伊庭潤は後者をえらんだ。申込書にも実名を用いている。

「たしかにあの人の筆跡です」

申込書に記入された文字をみて、杉坂房子はそう言うてうなずいた。

一週二日の教室で、伊庭潤は四月は皆出席、五月は一日だけ休んでいる。そして六月になると一回も出席していない。授業料は一年分前払いになっていた。

前ぶれもなしに、杉坂房子はあらわれたのである。配偶者の失踪といえば、プライバシーその

ものであり、隆志のほうから質問するわけにはいかなかった。

たまたまその日は、水墨画の授業はなく、塩村真弓の英語教室は四時に終わっていた。杉坂房子があらわれたのは四時五十分ごろであった。彼女のほうは、浦上ビル文化教室のことを、すこしは調べていたようである。夫の伊庭潤が水墨画教室に出なくなって、だいぶたっていることも知っていたようだ。

「夫婦なのに姓がちがうのを、おかしいとお思になるでしょう？」

と、杉坂房子は言った。

隆志はもちろんおかしいとおもっていた。ただそれを口にしなかっただけである。いまの彼の心象風景は、悲しみの灰色を基調として、そこには輪郭も起伏も、ほかの色彩も、ほとんどない。妻を失って以来、ずっとそうであった。

杉坂房子と会っているうちに、隆志は自分の心のなかに、微妙な変化がおこっているのに気づいた。

妻の死後、彼はあらゆることにたいして、好奇心を失っていた。その失われたものが、いまかすかによみがえってくる気がする。

杉坂房子の美貌が最大の理由であることは、隆志にもわかっている。

彼女の瞳に、隆志は強烈な個性をかんじた。すべての感情を、そこにうつし出すことを、毅然として否定している瞳であった。

「ええ、でも近ごろは、お仕事の関係で、旧姓を名乗られるご婦人がふえてきたようですので

……」

と、隆志は答えた。

「便宜上^{べんぎじょう}の名乗りではありません」と、杉坂房子は言った。――「あたしたち、籍は別々なんですよ。はじめから、そんな約束で、共同生活をはじめました」

「共同生活？ 何年になりますか？」

質問が口をついて出たあと、隆志はそのことを自分で驚いた。あきらかに消えかけた好奇心の復活ではないか。

「ちょうど一年たって、彼がいなくなりました。それから半年です」

杉坂房子はためらいの気配もなく、ごく自然にそう答えた。

「一年……」

先日、妻の一回忌^きをすませたばかりの隆志は、その時間の長さをたしかめるように口にした。

「あたしはけっして鈍感^{どんかん}ではないつもりです。それなのに、彼が姿を消す直前まで、そんな気配を、そう、なにひとつかんじませんでした。それが、あたしには……」

房子はあとのことはをさがしたようだが、あきらめて口を噤^{つぶ}んだ。

強い意志を瞳に埋めこんだこの美しい女性性、夫のとつぜんの蒸発の理由がわからず、またその前兆もつかめなかったことで、プライドを傷つけられたのであろう。

「一年ですか。無理でしょう、一年では」

と、隆志は言った。

「なにが無理なんですか？」

房子は首をかしげた。

「私は一年前に妻をなくしました。二十二年連れ添ってきた妻です。それでも、妻のことを、ほんとうにわかつていたのかどうか、いまでも自信がありません。この一年のあいだ、そのことを考えてきました。……二十二年ですよ。……いえ、年月は長いからいいというものではありません。それは知っています。それでも二十二年は二十二年で、私だって鈍感ではないつもりです。一年で相手のすべてを知るのは無理です。で、無理だと申し上げたのです」

隆志はそう言いながら、また自分で驚いた。これは妻の死後、彼の口から出た最も長いセンテンスのはずだった。なぜこんなことばが出るのか、自分自身さえ何者であるか、わからなくなるような気がした。

「ひとこともございません」

房子は意外にすなおにうなずいた。

「ご主人は、これだけはぜひやりたいといったことを、なにかおもちでしたか？」

隆志は、あまり立ち入ってはいけなとおもいながら、そうたずねた。

男の蒸発は、かねてどうしてもやりたいとおもっていることがあり、それがなかなかできないうえ、現状では将来でも難しいと見定めたとき、現状打破の発作的行為としてえらばれることが多い。

「さあ……」房子は首をかしげた。——「あの人は、おだやかな人でした。まるで神様みたい。人間としては、どこか、いっぽう変わっているのしかいえませんが。……でも、ぜひともいった欲望など、あの人にはなにもありません。……ですから、あたしは驚いているのです」

「欲望がまったくないなど、一年の観察でわかるでしょうか？」

「では、断言は取消しましょう。まったくないようにあたしにはおもえました、と訂正いたします」

「水墨画は好きだったのですか？」

「アート関係の仕事をしていましたから、関心はもっていました。でも、自分がアーティストになるなど、けっしておもっていません。……いえ、そうみました、あたしには」

「生き甲斐とか、目標といったものは？」

踏みこみすぎかな、とおもいながら、隆志はこれを最後の質問にするつもりで訊いた。

「あの人の母親と妹とが、行方知れずです。再会は、生き甲斐というよりは、あの人の夢でしょう」

「では、夢を追って？」

やはり質問は一つふえた。

「それしかないとおもいます。あの人の母親が神戸にいらしいという噂があったようです。……いえ、それは最近になってわかったことではありません。あたしたちが共同生活をはじめ前……そう、知り合ったところに、彼にそうきかされました」

「そうでしたか」

隆志はそれ以上たずねないことにした。

伊庭潤という男は、これまで二日か三日ほど、ぶらりと出かけることはよくあったらしい。

「ちよつと行ってくるよ」と、声をかけることもあったが、たいてい黙って出かけたそうだ。

同居はするが、それぞれ独立した人間として、自由に行動し、たがいに干渉しないこと。

どうやらこれが現代ふうの夫婦の理想像であるらしい。

杉坂房子は三十代の半ばにみえる。一年前に同居生活を始めた相手の伊庭潤が、彼女の最初の男性でなかったことは、その容貌からみてもたしかであろう。

げんに失踪している夫をさがしているというのに、隆志は彼女からそれほど切迫したものをかんじない。

伊庭の無断外出の最長記録は六日であつたという。このたびは半年に及んだ。房子が夫をさがしはじめたのは、つい最近になつてからであるようだ。ふつうの夫婦では考えられないことである。

（あるいはこれは、おれたちが夫婦と呼んでいる関係とは、かなりちがつたものではあるまいか？）

隆志はそうおもつた。

彼の周辺にも、いっしょになつたかとおもうと、すぐにはなれたりした夫婦もどきのカップルが何組もいた。むかしからあつたもので、なにも新時代の現象とはかぎらない。

これを進歩した夫婦関係と認めることは、隆志にはとてもできない。亡妻との二十二年の生活にかけて、それは許されないのである。

しかし、目の前に杉坂房子の伶俐れいりそうな美貌をみると、ただの軽佻浮薄けいちようふはくとはおもえない。いや、おもいたくない、というほうが正直かもしれない。

隆志がそれ以上たずねないので、房子は問わず語りに、

「伊庭がいなくなったからといって、とくに困るようなことは、なんにもありません。彼もそれ

を知っているのです、氣らくに蒸発できたのでしょう」

と、言った。

（それなら、なにも伊庭氏をさがすことないではありませんか）

よほどそう言いたかったが、さすがにそれは抑^{おさ}えた。隆志は彼女とむかいあっているうちに、
（こんなムードのよい美女から逃げ出すなんて、そんな男がいるのだろうか？）
と、ふしぎにおもえてきたのだ。

「とにかく大前先生に連絡しましょう。もうお宅に帰っておられるはずですから」
隆志は電話器をとりあげて、ダイヤルをまわした。木曜日には、大前茅海は明石^{あかし}の短大で指導
しているが、もう帰宅したところである。自宅は熊内^{くもんどおり}通なので、それほど遠くない。

——今日は明石から大阪へ直行しました。画商さんと相談がありますので。

電話口で大前夫人はそう答えた。遅くなりそうだということだった。夫人は大前画伯を実像よ
り大きくみせることに熱心である。このときも、「画商さん」というところに、必要なアクセ
ントが置かれているようにきこえた。

大前茅海は七十に近い日本画家だが、それほど著名ではない。装飾性のつよい画風から、一
時、仏画を盛んに描き、ついで水墨画に転向した。画風をしばしば変えたのは、焦^{あせ}りからきたの
であろうが、それだけ器用であつたともいえる。

画家としてのランクは高くないが、教え方は上手だという定評がある。俳句のグループに俳画
の指導をして以来、大前は教えるほうに自信をもち、浦上ビル以外にも教室をもっている。浦上
ビルの教室では、初心者むきのクラスは、もう弟子にまかせていた。

「今日は無理なようです。明日、ここへいらつしやい。四時半ごろがいいですね。教室が終わったあとですから」

電話器を置いて、隆志は壁の時計をみながら、そう言った。

房子はしばらく考えてから、

「浦上さんは、大前先生とは長いおつき合いなんですか？」

と、訊いた。

「教室をやっていたら、こととしてちょうど十年になります。大前先生とは、そのすこし前からの知り合いです」

「あたし、伊庭のことで、あまり多くの人と接触したくないのです。それに、伊庭は絵のわかる人ですから、きっと大前先生とはうまく行かなかったとおもいます。一年の予定を二カ月ほどでやめてしまったのですから……。できれば、あたしのかわりに、浦上さんに大前先生から伊庭のことを、きいていただきたいのです。伊庭がこれからどうするつもりなのか、まさか大前先生にしゃべっていないとおもいますが、なにかほのめかすようなことでもあれば……」

「わかりました」

と、隆志は答えた。

だが、伊庭がいなくなっても、べつに痛痒をかんじないという房子が、なぜ失踪した彼を追おうとしているのか？ 隆志にはそれがわかったわけではないのだ。はたして、プライドだけのためなのか？

そんな隆志の心を見抜いたかのように、房子は言った。